





展」を見て、多くの人々が文学館の設立やこの建物を文学館として利用することへの支持をノートに書き残してくれた。会員は200人を越えた。

その後、「市民の会」では第2期朗読会を開いた。それは「自作原爆文学を語る」という副題がついていて、広島在住の作家（小説家）に自作の原爆文学について語ってもらう企画であった。それは9月から始まり、今年の3月まで続いた。藤本仁、田端展、小久保均、中井正文、岩崎清一郎、文沢隆一、古浦千穂子の7人の方々に来ていただき、代表的な作品を朗読し、その後自作について語ってもらうという企画であったが、やはり40人の会場はいつも満席に近かった。広島作家や作品について知ろうという企画は成果があったと思う。

現在は朗読会の第3期に入るところである。今回は詩歌と児童文学にジャンルを広げ、「広島在住の詩人が自作を語る」というテーマで松尾静明、御庄博実、長津功三良、松永智子の4人の方々に7月、9月、11月、1月の第4日曜日をお願いした。また児童文学の方では三浦精子さんに「山口勇子論」を語ってもらうことにした。それぞれの方には朗読をってもらう作品の選定をお願いし、作品にふさわしい朗読者をお願いしなければならぬが、どんな作品が朗読されるか、どんなお話を伺えるか、今から楽しみである。

朗読会が奇数月になったのには理由がある。その間の偶数月は「峠三吉没後50年の会」の企画が入る予定である。もともと「広島に文学館を！市民の会」と「峠三吉没後50年の会」とは別組織ではあるが、両方の代表として私が入っていることや、「峠三吉没後50年の会」の中心となる人々は市民の会の会員であることもあって、市民の会の企画として「峠三吉没後50年の会」の企画に加わる予定である。実際の峠三吉の没後50年は来年の3月10日なので、来年1年間を没後50年としてさまざま企画を考えているが、今年はプレ50年としてすでにいくつかの企画を予定している。

自己紹介を兼ねて簡単に近況報告をするつもりであったが、かなり長くなってしまった。より詳しく「広島に文学館を！市民の会」と「峠三吉没後50年の会」のことやその企画について知りたいと思う方は次に市民の会のホームページを掲載するのでご覧いただきたい。

<http://home.hiroshima-u.ac.jp/bngkkn/>

これから広島と長崎をいろいろな形でつなぐことができると思う。